

EUのノーベル平和賞受賞に拍手

山内亮史

もし一切の武器を持たず平和を希求し続け、その挙げ句に滅んでゆく国が一つくらいあってもいいのではないか……。『風の王国』の作者である五木寛之がつぶやくように言った言葉が忘れられない。不戦は無謀か？

かなり際どい政治的意味を持たされることで、これまでノーベル平和賞の選考委員会には、さすがと思ったり、何これ？と思ったりしてきた。しかし、今回の「EU」の受賞には、そこに並ならぬ意図を読み取ることが必要な気がして、私なりに興奮したのであった。

二〇〇〇年一月、私はイギリスに滞在していたが、その時、テレビで二〇世紀の回顧番組が放送されており、この世紀が戦争の世紀であったことが映し出されていた。ヒトラー、フランコ、ムッソリーニ、天皇、そしてチャールズ、ド・ゴール、スターリン。様々な指導者たちが登場したが、鮮明なカラー映像もあってか、ミッテラン仏大統領の葬儀の席で、人目もはばからず大粒の涙を流して大泣きするコール独首相の姿に、私の目は留まった。ベルリンの壁の崩壊―EUの成立―統一ドイツの成立。この世界的過程を、ミッテランドロール、コールーゲンシャーが引つ

張ってきた。他方、サッチャーは「どのような統合なのであろうか。いきあたりばったりのヨーロッパ連邦主義には絶対追い込まれないようにすること。それが私の目標でなければならなかった」（『サッチャー回顧録（下）』より）と述べている。彼女は、イラン情勢、

ゴルバチョフ後のソ連軍の動向、レーガンの老いとブツシユへの懐疑の中で、NATOの解体を恐れ、「再統一し力をもったドイツ」の成立に立ちはだかつたのである。ミッテランは彼女を老練に翻弄する。彼はド・ゴール主義者ではなかった。英米ソのドイツ再統一への批判的空気の中で呻吟するコール。その時、ドイツ公文書によれば、ミッテランはコールに電話した、とある。「私の願いはドイツ国民と共にある」と。

日本において今回の受賞の解説は、シニカルな論調一色で、ギリシア救済のためにドイツに行動を促す目的とか、ユーロ危機機そのものへ世界の目を集めるためのものである、といった経済面でのみ語られることが多い。

しかし、EUの原点である一九五二年の「欧州石炭鉄鋼共同体（ECSG）」は、石炭と鉄という経済的手段を使いながら、ドイツと

フランスとの間で、ひいてはヨーロッパで戦争を不可能にする「不戦共同体」を構築することであった。そして、ドロールの下で考案された一九八六年の「単一欧州議定書（SEA）」で明確な「国境なき欧州」へ踏み出し、冷戦の経験を背景に加速しながら、EU条約に結実したのである。その後も二歩前進、一歩後退の「忍び寄る連邦主義」の歩みを続けてきた。

一つひとつ説明する紙幅はないが、「補完性の原理」、「柔軟性の原理」、「可変翼・多速度」といった調整安定装置を持ちつつ、壮大な国家止揚の実験が進行しつつあると私は見ている。その実験の中には、種々の社会政策や欧州環境庁（EEA）による環境政策、さらに三〇の都市が参加しての「欧州サステイナブル都市づくり」、「ソクラテス計画」、「コムニウス計画」、「エラスムス計画」、「ダ・ヴィンチ計画」、「ラファエロ計画」と名付けられる教育文化政策等々。そこには、ヨーロッパの思想と歴史の蓄積された精神がある。

グローバルイズムとナシヨナリズムの悪しき結合の下、不信と排除の時代にあつて、私たちはEUに「地球にとつての希望のメッセージ」（アラン・リビエツ）を見ないわけにはいかない。EUは「不戦共同体」の構築を目指す政治共同体なのである。平和賞受賞に拍手。否、ノルウェイの選考委員会の祈りにも似た決定に拍手。

八やまうち りょうじ・旭川大学学長